

愛知女短大 阪本弘子 名古屋市立女短大 佐野恂子 岐阜女短大  
 ○山田令子

目的 近年、女性の和服に対する考え方は変化している。しかし、その内容は地方によって異なり、愛知・岐阜は結婚費用のなかで和服費の占める割合が多い。そこで当地方の学生の母親の和服の着用頻度、子女の結婚支度として和服を調製する程度、結婚衣裳見せなどの行動が和服に対する態度、規範意識、被験者の基本属性によってどのように影響されるかを検討した。

方法 女子短大生の母親424名を対象に昭和59年11月下旬に調査した。和服に対する態度尺度はサーストン法によって作成した。子女の結婚支度として作る和服の量、その規範意識、和服に対する態度の関係は井上和子らの形式を用いて調査し、分析した。

結果 和服に対する態度得点によって被験者を和服に好意的な者から非好意的な者まで4分割し、和服に関する種々の行動とクロス集計した。その結果、和服に好意的な者ほど和服の着用頻度が高く、和服の着用に関するしきたりに肯定的で、子女の結婚支度に和服を多く調製する意図があることがわかった。次に、結婚支度に調製する和服の量を外的基準変数にとり、和服に対する態度、結婚支度に関する規範意識を説明変数として重回帰分析したところ、重相関係数は0.40となりあまり高い値は得られなかった。そこで説明変数に年齢や世帯の全収入などの基本属性を加えて数量化II類を用いて分析した。結婚支度として調製する和服の量の多少に大きく寄与している変数は、日常着として和服の着用割合、結婚支度に関する規範意識、居住地、世帯主の職業、和服に対する態度であった。なお、この分析の相関比は0.59であった。